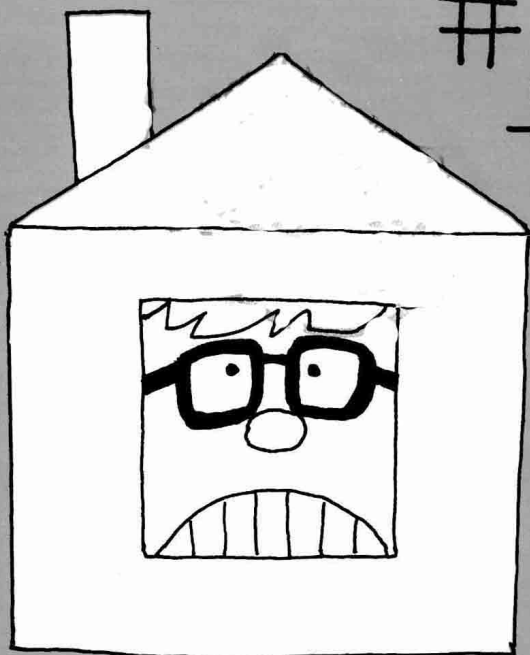


続家庭 論



上
乙
×
し

続 家庭口論

昭和五十年五月三十日印刷
昭和五十年六月七日発行

著 者 井上ひさし

発行者 高梨 茂

印刷 奥村印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二二

振替東京二二三四
©一九七五 検印廃止

続家庭口論 目次

猪鹿蝶とフルハウス
いのしかちよう

緇袍とドレス
どてろ

植木と空手形

ハミングと耳栓

ダイヤモンドと沢庵石

葬式饅頭とオリブ油

映画監督と医者夫人

マイクと鉛筆

ガリ勉と駅弁

本音と建前

ツリーと門松

さよならとグッドバイ

192 175 159 140 124 107 89 72 55 38 22 5

装幀・カット
東海林さだお

続
家庭
口
論

猪鹿蝶とフルハウス
いのしかちよう

1

人間とはかの動物とを区別する物指しには様ざまなものがある。たとえばまず、
「人間は火を使う動物である」

という区別の仕方がある。なるほどたしかに火を用いる動物は人間だけだろう。これはうまい区別法かもしれぬ、と思っていれば、このあいだ名古屋かどこかの動物園で小火があり、原因はチンパンジーのマッチ遊びであった、という新聞記事を読んだ。チンパンジーが観覧客の投げ込んでいったマッチをどこかに隠しておき、夜中になってそれを取り出し、人間の真似をしてマッチを擦ったのだそう。こうなると、人間だけが火を使う動物である、という定義になんとか



信が置けなくなる。

「人間は道具を用いる動物である」

という規定の仕方もあるが、猿が手の届かない所にある食物を棒を使って手許に引き寄せるというのは周知の事実である。となるとこれも危っかしい定義であるようにわたしには思われる。

「人間は言葉を用いる動物である」

なる定義もあるけれど、いるかの研究が進むにつれてこれも絶対的ではなくなった。いるかはどうかやう独自の音声をもって互いに通意しているらしい、というのが研究家たちの一致した見解のようである。

では、「人間は笑う動物である」という定義ではどうだろう。じつはこれも絶対的ではない。馬が笑うとはこれまたよく知られた事実なのだ。となると、人間と他の動物を区別する方法はないのか。わたしに言わせればたったひとつだけある。チャールス・ラムが言ったと伝えられる、
「人間は賭事をする動物である」

が、それだ。

たしかに、動物園の猿やチンパンジーが、観覧客からせしめたキャラメルを賭金がわりに、サイコロ賭博をしたなどという話はとんと聞かないし、競馬の馬が出走までの時間を『おれたちの前のレースでどの馬が一着に來ると思うかね』と、人參や角砂糖を賭けて暇つぶしをしたという話も、絶えて耳にしたことはない。賭事は疑いもなく人間だけに固有の面白い習慣のよう

だ。

わたしも少年時代は賭事にだいぶ熱中していた。なにかというと「わたしは孤児院の出身で」と話を切りだすことになるので気がひけるのだが、厚かましくもまたぞろ孤児院を持ち出すと、あのころは毎日、賭博をやっていたといつてよいだろう。

わたしたちの孤児院には様々なゲーム設備がととのえてあった。花札こそはなかったが、将棋盤、碁盤、トランプ、チェス、銀行ゲーム、バックギャモン、ルーレット、ビンゴなど、ちょっとした賭博場なみ。中でも、わたしたちに人気のあったのはビンゴである。

ビンゴを御存知のない方のために、ここでごく手短かに、それがいったいどういうゲームか説明しよう。まずゲームに参加する者は五十枚ほど用意されているカードの中から好き勝手に一枚選ぶ。カードにはタテ五列ヨコ五列、合計二十五個の枠があり、ひとつの枠に一から一〇〇までのうちの二十五個の数が印刷してある。ここで大切なのは、この五十枚のカード、どれひとつとして同じものはないという事実である。

さて一方、司会者がひとりいて、彼は箱の中から木の駒を一個ずつ取り出し、駒に刷ってある数字を読み上げる。駒の数は一から一〇〇までの百個。司会者が箱の中から掴みとった駒の数字を読み上げると、ゲームの参加者は己れの選んだカードの二十五個の数字を点検する。そして読み上げられた数字と同じものがカード上にあれば、その上におはじきを置く。そして、タテでもヨコでもよいそのおはじきが五個一列に並んだとき、

「ビンゴ！」

と叫んで立ちあがるのである。

このビンゴゲームにわたしたちが賭けたのはピーナツバター付パンだった。ピーナツバターのたっぷりと塗ってある四分の一斤の分厚い食パンひと切れ、これが孤児院のおやつだったのだが、それを賭けるのである。こう書くと「なーんだ、ピーナツバター付パンひと切れか。それじゃスケールが小さいからおもしろくないだろう」とおっしゃる方もあるかもしれぬが、事實はそうではない。時代が今とはまるで違う。なにしろ昭和二十年代の中頃のことだから、日本国中まだ物資不足、ピーナツバター付パンはたいした御馳走だったのだ。しかも場所は孤児院、普通の家庭と違って身のまわりにあるものはすべて他人のものであり、自分のものなどなにひとつない。衣服も机も蒲団も本もコップも茶碗もすべて孤児院のものなのだ。そのなかにあってただひとつ、自分のものが三度の食事とこのひと切れのパンだったのである。三度の食事はその場で食べてしまふからこれは残らぬ。だが、おやつのは五分後に喰おうが、あくまで保存しておくことが、これは自由だ。これだけは自分のもの、いつ食べようがその裁量は各自にある。ことばをかえて言えば、わたしたちにとっての唯一の個人的財産、それがこのピーナツバター付パンだったのである。

おやつのは鐘が鳴ると食堂へ走って行ってパンを貰う。そのパンにすぐ歯を立てるのは幼い子どもたちで、たいていの連中は腹の虫をなだめながら、だれかが勧進元になって、

「ビンゴをしようか」

と声をかけるのを待っている。

勸進元になればゲームに参加できないが、手数料としてパンを二切れ貰うことができるというきまりがあったから、だれかがきつと志願するはずである。それをみんなは待っているのだ。

やがてだれかが声をあげる。

「おれが勸進元をやってやらあ」

みんなは喚声をあげながら彼のまわりに集まり、全財産のパンを一枚のカードと交換する。参加者が三十名あればパンの数は三十枚。二枚は勸進元の手数料。だから賞品になるのは二十八枚。それをたとえ、一等賞が十枚、二等賞が八枚、三等賞が六枚、四等賞が三枚、五等賞が一枚と決め、ゲームを開始するわけだが、なにしろ全財産を賭けているのだから迫力があつた。それにだれよりも先に「ビンゴ！」と叫ぶことが出来れば、ビーナツバター付パン十枚という夢のような幸運が舞い込むのである。一度でいい、胃袋がばちん！と弾けて切れるほどのものを喰ってみたい、というのがわたしたちの願ひなのだったのだが、それが運がよければ可能になるのだ。わたしたちがこの賭ゲームに眼の色を変えたのも無理はないだろう。

孤児院の賭ビンゴのことを、わたしは長く書きすぎたかもしれぬ。が、決して枚数を稼ごうと思つたわけではない。あれから人並みにいろんな賭事に手を出してみたが、どれひとつ、孤児院のビンゴほどには面白くなかつた。いったいそれは何故なのかを考えてみようと思つただけであ

る。

もっともこの答は簡単だ。わたしたちはあのとき全財産をビンゴに投入していた。だから面白かったのである。

2

賭事が面白いものであるためには、全財産を投入、は無理だとしても、その勝負次第で自分の生活にかなりの影響が出てくる額の金を投入しなければならぬ、ということがわかって以来、わたしはあまり賭事には手を出さなくなった。

それだけの金を用意する余裕も、勇気もないからである。

ただ、次のような勝負は数年前までよくやった。そのころは毎日のように仕事で渋谷まで出ていたが、仕事が終わると、まず、有金はいって本を買ってしまうのだ。ただし、渋谷から市川までの電車賃として百円玉を一個残しておく。そしてその虎の子の百円玉を握ってパチンコ屋に飛び込む。玉を百円買ってパチンコ玉を弾く。これが勝負である。

玉が殖えればそれを景品に換え、パチンコ屋の周辺にうろつくしかるべき引き取り手に渡し、現金にしてもらう、すなわち家へ電車で帰れる。だが玉をすってしまったら、家までの三十キロを重い鞆を担いでテクテク歩かなければならないのだ。いってみればわたしはそのときの全財産を勝負に投入しているわけで、これはいやでも真剣になる。そして昂奮する。

日記を読み返してみると、一九七〇年は、渋谷から市川まで五度も歩いてゐる。たいてい夜の九時に渋谷を発^たって、江戸川を渡るのが夜明けの四時か五時、家に辿りつくのが、新聞配達少年が家に新聞を配るのと同じころ。歩くのは大好きだからべつに辛くはないが、途中が大変である。深夜だから車が飛ばして行く。向うは車道、こっちは歩道、生命の危険はないはずだが、なんとなく怖い。野良犬が寄ってくる。これも一匹ぐらいならどうということもない。しかし、数匹ぐらゐに囲まれるとこれもいい気はしない、どころかやはり怖い。そのうちに、

「ちょっと待ちなさい」

と、暗闇の向うから声がかかる。

「どこへ行くんだね？」

見るとおまわりさんである。これが一番困る。

「家に帰る途中です」

「ふむ。ここは新小岩だが、家はこの近くのかね」

「いや、千葉県です。千葉の市川です」

おまわりさんはじろっと目を光らせる。

「市川までどうして歩くんた。タクシーだって通っているじゃないか」

「金がないのです」

「それでもタクシーに乗ればいいではないか。家に着いたら、奥さんに金を出させればいいのだ

から……」

「いや、それでは勝負をした甲斐がありません」

「勝負だと？」

たいていこのあたりでおまわりさんは警棒を構え直す。

「勝負とは何のことかね？」

「賭けたんですよ、帰りの電車賃を」

「何に賭けた？」

「バチンコです」

おまわりさんは怒り出す。

「ちょっと交番まで来なさい！」

交番に連れて行かれ、鞆の中身を調べられる。なんとかわかってもらうまで最低三十分はかかる。しかもこういうことが途中で一度ではすまず、二度も三度も繰り返して起ることがある。こんなときは、家に着くのが六時か七時になってしまう。家にはさらに厳しい不審問が待っている。

「どうしたの、心配してたわよ」

「歩いてきた。渋谷を発ったのが昨夜の九時。日本橋を通ったのがかれこれ十時半ごろ……」

「真面目に答えてください」

「いや、本当なのだ。それで隅田川を十一時すぎに渡って、荒川を越えたのが真夜中の二時。江

戸川の西岸に着いたのが四時……」

「嘘に決まっています。正直に言うてください。お仕事だったのですか。それとも麻雀？ それとも……、まさか！」

女遊びの朝帰りでないことを証明するのに最低一ヵ月にかかる。

たしかに女性に向って、男性の賭事のやり方を説明することぐらい難しいことはないだろう。むろん、女性もパチンコや競馬や麻雀をするが、男性のやり方とちょっと違うようである。男性が賭事するのは、賭事をしていること自体が楽しいからである。パチンコの玉一個一個の飛び具合、玉の落っこち具合、駄目になり具合を男は楽しむ。麻雀でも同じことで、牌の流れ、ゲームの展開、勝利の女神の転々と座を変えて行く塩梅具合を、男は競技を通して観察して行く。その観察自体がまず楽しいのだ。また、賭事の結果を柔順に受け入れることも、男性に目立つ特徴である。勝負の結果にあまりこだわらず、勝てばむろん嬉しいが、たとえ負けてもそう口惜しがりもしない。たとえばわたしのように「市川まで三十キロを歩く」という罰則を素直に受け入れるのである。

男性のこの態度を、わたしは恰好いい、と強弁するつもりはない。賭博をしているときの男性は、成人ではなく大きくなった子供にすぎない、と言っているだけである。

男性に比べ、女性はより勝敗に拘泥するようだ。というよりはむしろ賭事の途中経過なぞはどうでもよくて、勝ったか負けたかだけが大切なのだ。

右のことを証明する例をふたつほど挙げてみよう。

わたしの友人にある放送作家がいた。彼こそは麻雀の天才で、放送局へ出かけて行くのは、半日が仕事、半分が麻雀の兵隊集め。正午すぎから深夜まで、局の近くの麻雀屋に陣取って、入れかわり立ちかわり現われるディレクターたちを相手に麻雀を打つのを日課にしていた。彼の雀風は豪放にして細心、しかも、わたしのように配牌時に字牌が多ければ国士無双、一九牌が多ければチャンタ、中張牌が多ければタンヤオ平和、と馬鹿のひとつ覚え式のやり方とはちがい、百や二百の早上りをしたり、その次の回にはハネ満で上ったり、いわゆる臨機応変の打ち方、滅多に負けない。それどころか、月に平均十万は稼いでいた。十数年前の十万だから、これは大した金額である。

「そう連戦連勝するんじゃ楽しくて仕方がないだろう」

あるとき、彼にこう訊いたことがある。すると彼は意外なことを言った。

「退屈だよ」

「まさか」

「ほんとうに退屈なんだ。そりゃあたしかにハネ満を上ったときは嬉しいよ。しかし、その嬉しさも五秒と保たない。あとはずっと退屈……」

「ではなぜ麻雀をやっているんだい？」

「金が要るんだ。放送で十万、麻雀で十万、計二十万ないと結婚資金ができないからね」